

6月12日 株式会社スイセイ 創業者 代表取締役 松村幸弥 氏

学んだこと、印象に残った言葉、講師へのメッセージ

今回の講義を通じて、特に印象に残ったのは「スタートアップの数だけドラマがある。毎年 3000 弱のドラマが起こっている」という言葉である。その一言に、スタートアップという世界の可能性、過酷さ、そして人が集まるからこそその難しさが凝縮されていると感じた。

株式会社シューマツワーカーのお話を通じて、創業から急成長、そして仲間との衝突や代表解任に至るまでの軌跡について学んだが、どの出来事も単なる「企業の成長の記録」としてではなく、人の感情が絡んだ生き方のように感じられた。資金調達のフェーズごとに期待とプレッシャーが交錯し、組織が拡大すればするほど、内部の軋轢や判断の難しさも増していく。ときには、長年共に歩んできた仲間と対立し、別れを選ばざるを得ないこともある。そして最終的には、自らが築いてきた会社からの離脱を迫られることもある。その一連の過程は、まさに「ドラマ」と呼ぶにふさわしいものであり、想像をはるかに超える困難が存在するのだと感じた。

私が特に心を動かされたのは、松村さんが仲間と衝突しながらも、組織の成長のために前に進み続けた姿勢である。信頼していたメンバーが辞めていく状況や、自分の意志とは関係なく代表の座を退く場面など、他人事として聞くだけでも胸が痛くなるような経験を、実際に乗り越えてこられた方がいるという事実、強い衝撃と尊敬の気持ちを抱いた。その強さは、単なる精神的なタフさではなく、「社長として企業を成長させなければならない」という信念や、チームに対する責任感の強さから生まれているのだと感じた。

私はこれまで、スタートアップに対して漠然とした憧れを持っていたが、今回の講義によって、良い面だけでなく、現実の厳しさも含めてその姿を知ることができた。華やかな成功の裏にある努力、葛藤、失敗、別れ、そしてそれを乗り越える強さ。こうした複雑な側面を含めて初めて、スタートアップという職業の本質に触れられたように思う。

また、「起業したいなら、起業している人が多い環境に身を置くべき」という言葉も非常に印象的だった。自分の意思を貫くには、日々の周囲の空気や刺激が大きな影響を及ぼす。起業の道は困難であるからこそ、同じ志を持つ仲間や先行者の存在が大きな支えになるのだと感じた。私自身、将来的に起業を視野に入れているが、今回の講義をきっかけに、まずはどのような環境に身を置くかを意識して行動したいと思った。

講義を通じて、スタートアップへの関心がさらに高まった。私も、自分なりの「ドラマ」を描くために、強い意志と覚悟をもって一步を踏み出していきたい。本日は学びの多いご講演をいただき、誠にありがとうございました。(経営学部2年)

これまでの登壇者の方と違い、松村さんはサクセスストーリー以外のお話もしてくださいました。会社の経営に関わる人だからこそ出会う困難があり、すべてが上手くいって今があるわけではないことがわかりました。

今回の講義を受けて考えたことは、『強い組織』とは何なのかということです。シューマツワーカーが、身内だけの賑やかな会社から一転、軍隊のような統制のとれた会社に生まれ変わる転換は、どの組織にも必要なことだと思います。しかし、それまでのやり方でも十分業績を伸ばしていただけあって、変化が怖くなり、現状維持を選んでしまうことも考えられたと思います。シューマツワーカーは社内の様々な問題が浮き彫りになったことをきっかけに会社を一新したそうですが、問題が起こる前に会社全体の方向性を定め、統制のとれた組織にしておけばよかったと思うのではないのでしょうか。仲間内の空気感は安心感や楽しさには繋がるかもしれませんが、だんだんと気が緩んでいくのは仕方のないことです。しかし、未来を見据えて、会社をもっと大きく、そして強くしたいのならば、統制のとれた組織への転換は必須なことだと思います。

組織というものは、上司と部下がいたり、納期が決められていたりするなど、ある程度の縛りがなければ成り立ちません。人間は、自分で自分を縛ることは得意ではありません。そこを補ってくれるのが組織です。どの社員も、心の奥底ではミッションの達成に心を燃やしているとは思いますが、甘い誘惑に負けてしまうこともあります。そこで、初心に戻って自分の仕事への責任感を認識してもらうために、組織の厳しさがあるのだと思います。強い組織には強い思いを持った社員と、その火を消さない仕組みがあることを学びました。(都市科学部1年)